

令和5年度 第2回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日時 令和5年8月7日(月) 午後1時30分～午後3時30分
- 場所 市役所南庁舎7階 南73委員会室
- 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員](敬称略 50音順)
- 江里口あけみ (柘塚西町ささえ愛隊 副代表)
- 大岩由治 (とよたシニアアカデミー 事務局長)
- 大山昌史 (市区長会 理事)
- 鬼木利瑛 (株式会社 eight 代表取締役)
- 小宮山利恵子 (株式会社リクルートスタディサプリ教育
AI研究所 所長)【副会長】
- 近藤 悟 (地域学校共働本部推進アドバイザー)
- 坂元玲介 (とよた多世代参加支援プロジェクト 会長)
- 戸田友介 (株式会社 M-easy 代表取締役)
- 古川由香 (市民公募)
- 古澤三秀 (市民公募)
- 牧野篤 (東京大学大学院教育学研究科 教授)【会長】
- 三ツ石靖子 (豊田市市文化振興財団 交流館課 主任指導主事)
- 事務局 八木健次 (生涯活躍部 部長)
- 加藤達志 (生涯活躍部 副部長)
- 小澤真里 (市民活躍支援課 課長)
- 和出広樹 (市民活躍支援課 副課長)
- 堀田真悟 (市民活躍支援課 担当長)
- 竹内祐衣 (市民活躍支援課 主査)

次第

- 1 開会・あいさつ
- 2 議事
「人生100年時代における学びのあり方と方策」
・学びの方策について意見交換【資料1、2】
- 3 閉会

1 あいさつ

A 委員

異常気象、根源的危機の時代に入ったというふうによく言われる。最近の話題は、日本から四季がなくなり二季になるのではないかということ。今年から二酸化炭素の排出量を減らしていても、100年ぐらいかかるのではないかという議論で、地球沸騰という言い方が出てきたりしている時代に入った。

私たちの日常生活にも今回の異常気象も含めて大きな影響があり、日常生活から様々な見直しをしていかなければいけない時代に入ってしまったのではないかと思う。今回の審議会で、これからの学びのあり方、私たちの日常生活のあり方をどう考えていくのかがとても大きな課題になってくると思うので、ぜひ皆さんの方から活発なご議論をいただきたい。委員のみなさんが始まる前に雑談されていて、お互いになにこやかに会話されるような雰囲気になってきたので、本日もぜひ自由にご議論をいただければと思う。

2 議事

●意見交換 ※要約

A 委員

今回の生涯学習審議会の取り扱いは、諮問事項ではなく、調査審議の取り扱いとなっていることを改めて認識共有しておく。現在、第9次豊田市総合計画を策定中であり、こちらにも反映していけるような議論ができればと考えている。従来の総合計画という形で5年後、10年後、20年後の豊田市の未来を一定の目的をもってその方向に持っていくといったことが可能なのか、むしろ、従来の総合計画の作り方ではない作り方をする必要が出てきているのではないか。簡単に言えば、もう予測がつかない社会に入ってくる中で、未来像を描くということそのものが問い返される必要があるのではないかという議論も出ている。

また、人生100年を生きる時代になり、気候変動も含めて様々な新しい事態が起こってくる中で、私たちがどう生きていくのか、また子どもたちにどういう社会を残すのかといったことを議論しなければいけなくなっている。それから否定的な言い方になるかもしれないが、ある自治体でVUCAの時代で予測がつかない社会に入ったという議論をしていたら、ある識者が、「将来人口、高齢化率、認知症数など予測はついている。予測がつかないと言って思考停止をしてはならない」とおっしゃった。私は、そういう意味で予測がつかないと言っているのではないと思っており、人口減少や高齢化率が上がることも予測がついているが、過去に経験がないのでそうなったらどういう社会になるかが分からないということだと捉えている。その意味ではやはり未曾有の社会がやってくるということをどう受けとめながら私たちが次を考えるのかということだと思う。

これから未来を考えていくときに、予測は使いながらも、過去に私たちが生きてきた時代とは違う社会になっていくなかで、どういふ社会を作っていく必要があるのか、また、子どもたちにどういふ形で社会を残す必要があるのかという議論をすることになると思う。重い課題になるかもしれないが、少し気楽に考えていただき、私だったらこうしたいというようないふ議論でいいので、皆さんで議論していきたい。

B 委員

学びを生かす機会と地域活性化について意見を述べたい。地域ごとに交流館があるということは市の強みであるが、未就学児の親子やシニアの利用が多い状況のように感じている。交流館の運営委員を経験する中でも、働き世代はあまり利用しないという課題感がある。

福祉現場でこれから業界の支え手がいなくなるという危機感のなかで、人材確保のため地域に出向いて研修を行うことがあるが、交流館を会場に選定することはあまりない。シニアを対象にした取組には交流館を使うが、働き世代が対象の場合には、夜に居酒屋等を使って交流の場をつくったりする。

私が交流館の運営委員を務めたとき、働き世代は私だけだったため、デジタルの話題はわからないという議論で終わってしまった。今後の交流館のあり方として、働き世代が来なくなる企画、イベント、使い方をつくっていかないといけないと感じている。

A 委員

交流館の利用者が限定されているため、より多世代での利用を促進しつつ、新しい層が使えるようにしていく必要があるのではないか。交流館の使い方、また企画の立て方も含めて、これまで関わってこなかった方々が関われるような仕組みが必要になってくるのではないかというご指摘だと思う。

C 委員

資料やアンケート結果でも交流館というワードが頻出しており、交流館が市民にとって身近な施設であるという認識があつて嬉しく思う。B 委員の意見のとおり、実態として、子ども、若い世代、高齢者の方々に利用者が固まっている。昼間の事業だと働き世代は当然来られないし、夜に働き世代向けに事業をやっても意外に集まらないこともあり、あまりやっていないのが実情。

働き世代で、学びたい人は、もう少し専門的なところに行っているかもしれない。というのも、本格的に学ぼうと思う人は、きっかけとしての交流館ではなく、最初から専門的な知識の習得や仕事に役立つことを学びたいというニーズの方

が多いのではないかという気がしている。仲間作りや交流が目的の学び、足がかりになるような学びに人が集まらず、だんだん夜の事業が退化したのだと思う。夜の事業で今実施しているのは、コンサートや星を見る会などをやっているが、固い「学び」というのは確かに少ない。交流館の職員が多様な学びの専門知識を持っているわけではないので、交流館だけではなく、企業や大学と連携した専門的知識などが必要。交流館が地域の拠点施設というのは認識されているので、こうした各機関と連携した学びが交流館で提供されれば足を運びやすいと思う。

また、交流館も時代とともに緩やかに役割や機能が変わってきた。平成 30 年に条例改正してから 5 年経過し、交流館の現場も貸館に特化してきたような風潮もありつつ、生涯学習施設から交流施設の意味合いも強くなってきている。今こそ、交流館の職員自身も意識を変え、学びの重要性を認識しないといけないと感じている。そのためには、職員自身が学び直ししつつ、交流館の中だけではなく、企業や学校、様々なところと連携ができると、考え方も活性化すると思う。

A 委員

働き世代の方々は、夜に交流館で事業をやってもあまり集まらず、どちらかというところ専門的なところに行ってしまうのではないかというお話があった。

また、大学や企業と連携を図り、交流館をより幅広く使ってもらえるような施策はないだろうかということ、もっと言えば、条例改正の中で少し貸館施設化していくところがあるが、改めて学びの施設であることを考え直す必要があると感じているというお話だったと思う。

D 委員

地域学校共働本部は、当初学校の中だけで活動していたが、学校の中だけだと活動が制限されてしまうため、中学校単位で活動を仕組むということをしつつやっている。それには、地域の拠点である交流館が非常に使いやすい。

「未来塾」は、夏休み中 7 交流館を借りて平日の午前中 2 時間、教員 O B が子どもたちに学習支援をやっている。これは 4、5 年前からやっていて、コロナが明けてから多いところで 100 名くらい集まる。今年は交流館の大会議室を借りて、申込者のかなりの部分を受け入れることができた。小学校でやると、セキュリティの問題などいろいろと制限されるため、やはり交流館を使わせてもらえるのはありがたい。

「土曜学習」は年間を通して土曜日の午前中、7～8 の交流館を借りて実施しており、三味線、茶道、将棋、和太鼓などの講座を受けられる。募集は学校を拠点にやっており、非常にたくさん集まる。交流館などにチラシを配っても限られた人しか見ないため、学校を拠点に募集できることはありがたい。講師は、有料

で教えているようなプロの方に、何とかお願いして無料で教えてもらっている。

この事業は基本的にはお金を全く取らないのだが、一番のベースは、経済格差が教育格差という観点。今はお金を払えばどこでも行けて、優秀なところでしっかり教えてもらえるが、お金がないと行けない。また、保護者が積極的に関わって送迎などをやる人でないと子どもが参加できないため、やる気のある子どもができるだけ参加できるように意識している。経済的な負担、保護者の負担も軽減するようにしている。そういう中で交流館を使わせてもらうというのはとてもありがたい。

A 委員

地域学校共働本部の方もいろんな活動をするときに交流館の大きい部屋を使わせていただいてとてもありがたいということ。豊田市の地域学校共働本部、コミュニティ・スクールの特徴について教えてほしい。

D 委員

一般的には、市町村単位でやりたいこと、活動の形態を決め、モデル校を作り、市内全部に広げるといふところが多いと聞いている。豊田市の場合は都市部から山村部まであるため、一律にならずにそれぞれの地域性を生かした取り組みからスタートしてきた。自由度が高いため、創意工夫によっていろんな活動ができる。例えば、ほとんど全ての学校で共働本部が学校の中での学習支援や学校の環境整備を地域の人たちをお願いしている。そのほかに、中学校部活動の地域移行や地域の人たちを学校にお呼びしてキャリア教育を行うということも地域学校共働本部主体でやっていくところもある。

小学校では部活動がなくなり、子どもの授業後の活動がほとんどなくなったため、6校の小学校で週2回、部活動に変わって地域の人たちが活動を支援している。地域ごとの創意工夫でいろんなことができるのが地域学校共働本部の良さ。そのためには人材が必要であり、ネットワーク化やノウハウも必要。活動を広げた時の一番の問題は、コントロールするコーディネーターがいないと結局行き詰まってしまうということ。決められたことをやることはできるが、新しいことをやろうと思うとそこが今後課題かなと思う。

A 委員

文科省は、学校運営協議会を設置した学校をコミュニティ・スクールと位置付けており、地域学校共働本部の活動と一体的に推進している。豊田市は、中学校単位でコミュニティ・スクール連絡協議会を設置し、中学校、小学校の地域学校共働本部と連携して小・中学校の連携及び地域ぐるみの教育を推進している。共

働本部の字も「協」ではなく「共」という方が使われている。地域学校共働本部と交流館がいい関係があって、そして様々な活動が展開されているということをも D 委員からご紹介いただいた。

E 委員

交流館に行くとき色々な教室やサークルの案内が貼ってあるが、行って初めて知る事業もあり、一般の市民に見えてない。学ぶ機会となる情報が一般に届いておらず一元化されてないと感じる。

健康長寿社会がベースにあり、その中で生涯学習は 1 本の幹なのだと考えている。豊田市は、市民大学制度がないが、例えば、豊田市民学び創造大学といった呼称で設立してはどうか。こうした市民大学制度を生涯学習の幹として、枝葉に学びや体験等のカリキュラムをぶら下げたような学びのプラットフォームがあるとよいのではないか。プラットフォームに参加すると学ぶ意識を持つことができ、学んだ履歴がそこに積み上がっていくようなもの。例えば、著名人による講演会や体験は市民だけでは難しいところもあるため、市が旗を振ってくれるとよい。個人的には、放送大学で学んでいるが好きな時間で学ぶことができるのがよい。

F 委員

プラネタリウム事業の仕事を担当していたとき、平日の昼間にゆとりのある人、主にシニア向けに大人の星めぐり事業を企画した。どうやったらニーズを持っている人に情報が届くのかすごく悩んだ。広報やチラシはフライヤーとして撒くが、事業が終わってから度々、「そんな事は知らなかった。もっと早く知っていれば来たのに」といったことを言われた。

いつもいろんな情報があふれており、情報は欲したときにそのタイミングで目にするとう有効な情報になるが、流れで情報を見るときはその情報に対して前向きな姿勢が起きず無に等しい情報になってしまう。そのため、情報を的確にいいタイミングで欲している人のところに届けたい。例えば、シニアの人だけが求める情報を集約したシニアインフォメーションのようなものを作ったらいいのでは思っている。

シニアアカデミーは 60 歳定年を想定して始まった事業であるが、通年コースの年齢構成と男女比について、今年と去年を比較して調べた。まず、男女比は、今年男性：女性 = 1 : 3。去年は 1 : 2。定年延長が影響しているのかと思って年齢を調べてみたが、60~64 歳までの年齢の人数に大きな変化はなかった。シニアアカデミーの一番コアになるターゲットは 60 代後半から 70 代前半。そこだけで 7 割ぐらいの人数。だから、60 代前半と後期高齢者はシニアアカデミーを

利用して学ぶ人がすごく少ないということも分析してみてわかった。事業の計画や情報提供は、そういう分析のもとにできるといいと思う。

それから、「活躍」の具体例を考えると、大谷翔平さんのように周囲の注目を浴びるようなことをするっていうのが一番の「活躍」、あるいは就労も「活躍」だと思うが、シニアだと社会に出て趣味やスポーツやいろんなことに積極的に取り組むことも「活躍」かと思うので、それも含めた施策があるといいと思う。

A 委員

どう周知をするのかは永遠の課題だが、ターゲットを定めた情報発信やプラットフォームなどのワンストップによるサービスなど様々な考え方があると思う。現在、国でも学歴ではなく学習歴という社会に切り替えていく議論をしており、デジタルバッジといった個人の学習履歴をデジタル化する取組も検討している。こうしたことも踏まえて、学ぶことをどう意味づけるか。また、プラットフォームがあったらどうかという意見もあった。

また、高齢者の「活躍」について、人の役に立つだけではなく、自分が社会でイキイキと生きていくことそのものが活躍だという捉え方、そしてその中でどういう関わり合いが持てるかイメージできるといいという意見もあった。

D 委員

「活躍」の議論に関連して、中学校部活動の地域移行について、一番の問題は指導者がなかなかいないことである。現役世代は仕事をしているため、一線を退いた人たちが指導者の対象になると思う。学生時代の経験があれば、学び直しをしなくても身につけているものがあるため、経験者をうまく集めるような仕組みがあると人材確保に結びつくのかなと思う。大学生を指導者に迎えると、学年が変わり授業形態が変わったりすると1年で終わってしまうことがある。

そういう中でどう人材を集めるかが悩ましいが、チラシだとなかなか難しい。一番確かなのは、隣近所で声をかけ合うといった小さい社会の中で情報交換できる仕組みができるといいと思う。地域と一体となった学校づくり、子どもづくりが形として表れてくるととても良い。

A 委員

部活動の社会化を進める中で指導者をどう確保するかという問題に対して、地域で子どもを育てていく中で指導者が出てくるような仕組みや声掛けの関係性のあり方もこれからは大事になるのではないかという話であった。100年生きる時代で、幼稚園から高校までで子どもに関われるのは15年間しかない。子どもたちには、知識を蓄えることではなく、学び続けるための基礎を身につける

ことであるべき。そうした中で、こどもが地域住民と一緒に探究活動やスポーツ活動も含めて一緒にやることを覚えてきながら学び直しもできるような子どもたちを育てようということで、コミュニティ・スクールが始まっている。その意味では、コミュニティ・スクールのあり方、交流館の活動、地域のシニアが活躍するといったことがうまく結びついてくるといい形ができるのではないかと思った。

F 委員

学びがインプットで、活躍はアウトプットだとしたときに、アウトプットが最終目標じゃなきゃいけないのか、あるいはインプットだけでもいいのかということ。若い世代はアウトプットを目指してほしいと思ったりはするが、シニア層は必ずしもアウトプットまでハードルを高めなければいけないのかどうかと感じている。

G 委員

今までの社会はとにかく課題を解決するということがあったと思うが、課題が起らないような関係性を地域や仲間で作っていくことが重要だとずっと思っている。関係性のある状態を作っておくと、困っているときや何かやりたいときに仲間が集まってアイデアを出して解決していくというようなことが起きていく。関係性が大事なことが私はわかってきたのだが、世間ではそれほど評価されていない気がする。先ほど、F 委員が発言されたシニアはアウトプットまで必要なのではないかということもそこに理由がある気がする。

交流館でもこういう関係性を作っていると思うが、課題を解決するよりは低く扱われているような気がする。関係性を作る段階と関係性があったうえでの行動を起こす段階は両方すごく大事なのではないか。こうした関係性に着目した学びのあり方を周囲が理解すると何か変わるのでないかという気がした。

これからの社会が過去にない状況になっていくとすると、関係性のある良い状態を作っていくことがすごく大事な気がしている。地域コミュニティあるいはテーマ型コミュニティかもしれないが、関係性を政策として打ち出すことはできないかと思った。

また、部活動指導員のことに関連するが、過去の成功体験をたくさん持っている人ほど経験が障壁になることがあるのではないか。この間、友人に背泳ぎの泳ぎ方について指摘されたのだが、昔は良かったけど今・これからは違うということとは学び直せるといい。

それから、バスなどの公共交通において、シニアパスの子ども版のような施策があると、子どもたちが自分で自由に移動できて行動範囲が広がるのではないか。

山村地域では、地域の交流館に行くにも子どもだけで歩いていくことは難しかったり、市街地でイベント情報があっても親が送ってくれないと行けないという状況がある。

A 委員

インプットとアウトプットの議論があったが、学びや学習という考え方も変えなければいけないのかなと思う。例えば、アンラーンは、ラーンの前に「アン」がついているがこれは否定語ではなく、学んでいる事を一回崩して新たに学びほぐしていく考え方で、新しく学んでいくことに関わってくるもの。学んだら出さなきゃいけないとか課題解決をしなければいけないということではなくて、自分が変わっていくことを楽しむことも学びとして捉えておいたらどうか。学んでいくと自分も変わるし、学ぶことによって関係が変わっていくので、いい関係が出来上がってくるという受けとめ方を基本に考えたらどうか。

国のギガスクール構想の中で、山間僻地のこどもたちがオンラインで個別学習ができるように企業がバックアップするということを考えている。個別学習でいつでもどこでも各自がそれぞれ学習することを推奨していく施策であるが、G 委員が発言されていたように子どもたちが動き回るような社会のあり方を考えていくことも一つだと思う。うまく両方が成り立つような形を作りながら全体として底上げがなされていく社会が望ましい。そういうことも含めていろんな人が動けるようなあり方、社会のあり方といったことも大事ではないか。

B 委員

生活困窮者の支援をする中で、学びというキーワードはとてもハードルが高いと感じている。生きていくことで精一杯な人、親が急に蒸発していなくなっちゃった人からすると、学びというのは、今暮らしが安定している人の話だと思われる。学びという言葉を知ると、学校教育の学びのイメージがどうしても強くなってしまいうため、言葉の意味や使い方も、市の政策としてやるのであれば考える必要があるのではないか。

県内の通信制に通う高校生を集めて、豊田市で福祉研修を開催する「開拓プロジェクト」をやっている。参加者 19 名のうち 5 名が、経済的な理由で全日制の学校に行けなかった子。その子たちからすると、受講料無料で交通費を出してくれる福祉研修は最高の学びといえる。生活困窮者、障がい者、認知症の人なども含めた学びの概念を広く浅く考えていく必要がある。

A 委員

これまで学校中心に物事を考えるような社会をつくってきたこともあり、学

び、学習、教育っていうとやっぱり学校を思い出す。生涯学習や人生 100 年時代の学びといった議論の中では、そうしたものを壊していかなければいけなくなっていると思う。学校での学びは当然大事だが、むしろ日常生活の中でどう学んでいくのかどう生活を作っていくのかということ。

貧困問題の話もあったが、経済的な貧困が関係性の貧困に繋がって、それが生きる力に繋がっている。ある意味ではそれを否定されるような関係になってしまうこともあるとわかっているため、やはり学ぶことの意味のあり方も、組みかえなければいけなくなっている。もっと違う言葉があれば置き換えていく必要もあると思うがどうか。学習とか学びという言葉を使っているが、もう少し何かいい言葉はあるのだろうか。

H 委員

E モニターアンケートについて、人によって学びの定義が違ったり、学びのレベルが違ったりするため、「あなたにとって学びとはなんですか」という質問が一番初めに必要だったと思う。アンケート結果をみて、学ぶ必要がないと思っている方が 2 割いらっしゃることに驚いた。学ぶ必要がないと思っている方たちは、生産者になる視点がなくて消費者の視点しかないと思う。消費者だと、調べればわかるので十分という答えになる。生産者の視点が全く欠けている方が学ぶ必要がないと思っているのではないか。今の時代は、消費者と生産者が分かれているわけではなく、誰もが生産者になれる時代になっているので、どうやったら生産者、つくり手側に回れるかということを考えてもらうことも必要。

交流館の話は三つに分けて考えた方がわかりやすいと思っている。一つ目は交流館自体の稼働の話。労働人口の方たちに利用いただきたくても現状の子どもたちと高齢者だけでいっぱいだったら利用者の拡大は難しいとなる。

二つ目はコンテンツの話。専門的なものをやるのか、あるいは軽いものでも周知の仕方次第では来てもらえるのか。

三つ目は発信。欲しい人に届いてないのは非常に残念。私は、2015 年にリクルートに入社したときに、首長や政治家を対象にイベントを主催したが、メディアが 2 社しか来なかった。多くの社員が関わって有名な方にも来てもらったのに 2 社しか呼べなかったのかと社長に怒られた。いくらいいことをやっても知られなかったらないものと同じだと言われ、それがすごく頭に心に残っている。それ以来、必ずメディア等とあわせて発信するようになってきたので、発信は非常に重要なことと思う。

シニアのことにに関して、電車でお年寄りに席を譲ったところ、年寄り扱いするなど言われたことを思い出した。シニア用、子ども用と学びを分けるのが果たして今の時代に適しているかどうかという気がした。例えば、アメリカの事例を見

ると、あまり年齢で分けておらず、スマホ教室を図書館でやると、移民の若い方、子ども、高齢者も参加している。年齢で分けるのが今後どのくらい時代にあっているかを検討するいい機会かなと思う。もちろんシニアの方向けにやらなきゃいけない講座はたくさんあると思うが、実は若い人も受けたいとか、もしくはシニアと言われると行きづらくなることもあるかもしれない。そこを話し合うのもいいかもしれないと思う。

F 委員

シニアアカデミーの「シニア」については、制限はなく成人ならどなたでもいいというスタンスだが、やはり提供する側も相手がどういう方かある程度絞らないと、届け方が変わってくる。シニアアカデミーの講座は毎週平日という形で実施しているため、どうしても60代後半ぐらいの方が主流になる。ただ60代前半と80代後半の方が同じ講座を受けると、親子ほど違うので、ジェネレーションギャップみたいなものも発生する。募集対象としては、青少年が参加してもうよいが、なかなか来ないのが実情。

また、シニアに情報を届けるときに、若者と同じようにSNSやホームページを使おうと思ったが、事業後のアンケートではSNSなどで情報を見た人が少ないため、どうしてもチラシや新聞など紙媒体が不可欠だと感じている。

A 委員

シニアも含めて、概念を変えなければいけなくなっていると思う。私たちはシニアという言葉を使って高齢者のことを言っているが、例えばシニアアドバイザーとジュニアアドバイザーがいて、シニアアドバイザーは年齢に関係なく上級アドバイザーという意味。年を重ねて経験をいろいろ重ねてこられた上級な方々という意味ではシニアでいいと思うが、本来は年齢で区切るものではない。日常的に高齢者をシニアと表現してしまっている節があり、同時にシニアの活躍を議論すると定年がある社会が基本になっている。

定年がある社会は、工業社会が作ってきたという面がある。例えば、農家の方に定年があるかというのと体が動かなくなるまで働いていらっしゃるし、商店の方々に定年があるかというのと、店に立てなくなるまでは定年ではない。学校教育、学びや学習という概念も当然切り替えなければいけなくなっていると思うので、ここで議論ができればと思う。

I 委員

学びのそもそもの概念について、このアンケートを回答した人の学びの定義がそもそも違うだろうなと私も思った。子どもたちの生活の大半を占める学校

だと 100 点を取る数字評価が目標になっている。誰が見ても良いものにしないといけなとかではなく、数字で表せない経験、達成感などの機会が極端に少ないと思っている。こうしたことも学びの一つかなと思うと、豊田市の学びに、座学で新しい知識を得るとか資格を取得するとかではないものも含むことを、きちんと周知していくといいなと思う。

この間、SDGs についての取り組みを調べる授業で、結果的に調べる内容が決まっていたと子どもが不満を言っていた。学校全体でまんべんなく取り組んで、文化祭で掲示するとの理由があったと思うが、子どもたちがやってみたくとも、なかなか学校の中だと叶いにくい状況がある。自由課題のような本当に子どもたちが今これを知りたいと思ったことを表現できる場が比較的身近にあって、それを先生や地域の方、専門家の方たちがサポートをする体制があるといいなと感じている。

このアンケートで、学びたいと思う気持ちを後押しするために必要なものは何ですかという質問に対して、学びたいと思えるきっかけ、時間の確保という回答が多い。チョコザップのような 5 分で運動できる手軽さみたいなものが、働き世代の学びに必要なのかなと思った。場所を問わずに使える、オンデマンドで観られるコンテンツとかが有効かもしれない。もう少し上の世代の方ならばスーパーの入り口や病院の待合室など普段よく行く場所でちょっとしたミニ講座をやるとか、なにか目にする耳にすることをきっかけに自分で学べるものが広がっていくと、学びのハードルが高くなって良いなと思った。私も答えはないが、学びってという言葉に変わるものが何かあるといいなと思っている。私も先入観を持っている学び、学習、テスト、資格といった固いイメージに代わるものがあるといいなと思う。

A 委員

E モニターアンケートについて、学びを必要としてない、必要と思わない方が 2 割いるっていうのは大きいなと私も思っていた。国の生涯学習調査でもあまり学んでいないという結果になることが多い。要因として、時間がない、お金がかかるといったことがあるが、一般的に消費者の心理からいえばそれは言い訳で、実はめんどくさいだけなのではと議論をしている。チョコザップのような学びというアイデアが出たが、気軽に学べたら面倒くさくなくなるかもしれない。そもそも自分が楽しいことには時間を割いて行っているはずなのでこうした観点による作り方もあるかもしれない。

J 委員

学ぶことはそこら中に落ちていると思う。学んでいますかと言われると学ん

でないと思ってしまうが、気付きも学んでいることだと思う。特に小さい子どもは1日1日ちゃんと学んでいる。教科書みたいに学んでいますかと言われてたら、それは違うが、子どもが学んでいることを見てお母さんも日々成長していってくださっていると思う。だから学ぶという表現が何とかならないかと思う。あと、年を取ってから学ぶと言われるとちょっときついが、いつも何かやれることはないかなと思っている人が多い。あとシルバーシートの話も、座らなきゃいけない人と座らなくていい人が居るはずで、体調の悪い人とかはそこに座らなきゃいけないし。あんまり区別をしすぎるとそこに座るのが悪いみたいな気になるし、親切でやってくださっていると思うが、親切が押し売りになってはいないだろうかと思うときもある。年をとっても、動ける人もいるし、若くても手を差し伸べなければならない人もいる。

A 委員

ジョージア大使がシルバーシートに座っているのをSNSに投稿したらすぐ批判されたことがあった。それに対してジョージア大使は、「空いているから座っているのであって必要な人が来ればどきます。本来こんなシートがなくても席を譲った方がいいのではないかと反論されて、結果、正論だということになった。困っている人がいれば席を譲るのが本来あるべき姿であって、シルバーシートだから譲らなきゃいけない、座っちゃいけないとかそういう議論ではないと思う。

障がい者や高齢者が増えてくる中で議論になるのは、今まではすることに価値があったり、何かを形にしたり問題を解決することに価値がある社会だったが、これからはいることに価値があり、お互い認め合う関係ができることが大事ではないかという議論がある。学んで知識を蓄えて成果を出さなければいけないみたいな価値観になっていると思うが、そうではないとわかってもらえるようになるとよい。どうしてもそのような捉え方が一般化しているため、学びの意味を少し組み替えるいい言葉があればと思うし、しばらくないのであればあえて使いながら従来のような意味では使わないようにするといったことも必要かなと思う。

G 委員

先日の自治区の役員会で、子どもが減少する中における小学校の今後について、区民向けにアンケートを行う案内があった。浄水地区は小学校と交流館が一緒にあるためとてもいいと思う。旭地区は、小学校・中学校・交流館がそれぞれ別々にあるが、これから人口も減るので、同じ場所に用があって立ち寄ることが自然におこれば、さきほどお話した良い関係や良い状態が勝手に出来て

くるかもしれない。会う目的がなくても一緒にその辺にいただけでもいいかもしれない。子どもの数が減っていくなかで学校の統廃合として考えるのではなく、地域の中で学んでいく場所をどうしていくかという総合的な話なら面白いのではないかと思った。箱物かつお金がかかる話だからすぐには難しいと思うが、面倒くさくない状態にするというのは、結局そういうことなのではないか。学校と行政が一番変わりにくいけど、そこをどうにか変えることを考えられるといい。

A 委員

私も浄水に関わったことがあって、浄水の作り方は面白い。あれができたことによって住民と生徒との関係がものすごく良くなって、クレームがなくなったと聞いている。

私が関わっている北海道のある小さな町で、小学校を統廃合して小中一貫の義務教育学校にしていく議論をした。面白かったのは、教育長や議会の方から、学校の統廃合ではなく町民の学習施設全体の統廃合について学校を中心に考えているだけなのだと言いだした。簡単に言うと、生涯学習センターの中に小学校と中学校を置く。そこに町民が集う食堂、大きい図書館も置くという案が議会から出てきた。もう入札も終わって建てることになっている。子どもたちは町民がご飯を食べているところを通らないと教室に行けない。教室に行かなくても食堂に行って町民と一緒にご飯を食べていけば登校扱いでいいのではという話まで出た。今後、統廃合を考える上で、そうやってみんなが混ざっていく、お互いに関与しながら、お互いが学べる関係を作っていくということも一つあるのではないかなと思う。

B 委員

学びに変わる言葉として遊びというキーワードがいいのかなと思う。一つの例として、パチンコ、競艇、競馬をやっている人はとても勉強していると言う。パチンコとかギャンブルは社会悪みたいなイメージもあるが、仕事の合間の昼休憩中は、携帯でパチンコ屋のデータなどを見て、お店に行ったらそのデータを見ながら何時頃が一番出るのか分析するなどとても勉強している。お金も投資しており、これも学びといえるのではないか。要介護状態の方の中にも一定数、パチンコ屋に復帰したいという方がおり、楽しみになっている。高齢者が自らスマホを買ってデータを見て勉強するという行動にもつながっており、こうしたことも良いのではないか。

F 委員

イギリスの作家バーナードショーの言葉で、「年を取ったから遊ばなくなったのではない。遊ばなくなったから年を取るのである」という言葉がある。いつまでも遊ぶということをやめなければ、急激に年を取ることはないっていうのは、今ちょうど言われたことと同じで面白いなと思った。

A 委員

工業や産業のことをインダストリーというが、もともとは勤勉という意味。勤勉性できっちり枠にはめてやっていく、目標を達成していくというのが工業のあり方だったが、この社会はすでに工業社会ではなくなっている。高齢社会、長寿社会を迎えて様々な生き方が認められる社会になってくる中で、まだ、遊びは労働の余暇にあるものみたいなことになっている。そういう意味でも言葉を変えろということが必要かもしれない。

H 委員

10年弱ぐらい前、アメリカの学会に出たときに、ある方が、これからは遊ぶ・学ぶ・働くが三位一体になる。遊んでいるように見えて働いている。働いているように見えて学んでいるみたいなことが、特定の人だけではなくて多くの人に見られるような社会になるとおっしゃった。今自分自身のことを改めて考えると、私は人から見ると遊んでいるように見えるらしい。仕事はしているのにいろいろ飛び回っていて遊んでいるように見える、一方で学んでいるようにも見えると。アウトプットしながらインプットしながら。結果的には稼いでいる。そこに三位一体のヒントがあるかもしれない。

もう一つ、東京学芸大学で5年ぐらい前からずっと、何でも面白がれる力をどうやって育成するかを共同研究している。そういう人を育成すると生涯学習ができる人に育っていくのではないかという議論があった。面白がるとか遊びが非常に重要なポイントになるのではないかと思った。

D 委員

どんな言葉を使ったとしても、結局はその言葉が持っているイメージがあり、定義づけの問題だと思うが、学びという言葉はやはり必要だと思う。基本的にこの学びという言葉を使いながら、あとはどう定義するか。定義をしつつ、それを達成するためにどういう施策がいいか考えた方がいい気がした。

A 委員

どうしても言葉には時代背景や歴史があるので、簡単には変わらないが、ここ

では少し気をつけながら言葉を使いたいと思う。

K 委員

豊田市には今 298 自治区あり、その中で中学校区ごとに地区会長が 28 人いる。藤岡は 24 自治区あり、北部の 18 自治区と南部の 6 自治区が一つのコミュニティを形成しており、大きさ、人口、世帯といった様々な違いがある。そうした中で藤岡南地区は平成 23 年に藤岡南中学校ができて、27 番目にできた新しいコミュニティ。

コミュニティの会長として、交流館の運営委員会、中学校などのコミュニティ・スクール、地域学校共働本部など職をいただき様々な会議に出席している。交流館の運営委員会では、働き世代の利用が少ないことが話題に上がったが結論は出なかった。審議会に出席するにあたり、過去の会議録を読んだところ、今と同じ内容の議論になっているように感じた。10 年間様々な意見が出ているにもかかわらず、交流館のみに関して言えば、当時の課題が何も解決できていないのではないかというのを強く感じた。それは行政がどうだとかでもないし、地域が頼りないのかという話になるかもしれない。

豊田市の多くは集団下校をやっていると思うが、中山小学校では、教職員の負担があるので個別下校を取り入れた。多くの地域では学校が終わると先生が外に出て途中まで見送ったり、朝も早くから行ったりされていると思うが、それをやめましょうという話になった。先生たちは、校門を出たら家庭や親の責任だよと言う。一方で、地域の方々や P T A の方々は、学校の責任じゃないかという話になって、最終的には地域で見守りましょうという話が出てきた。しかし、地域の人も働きに出ているから、昼間に見守るのは無理な話であったりする。

生涯にわたって学び、学習を続けていって、人間が人間らしく楽しく生活できるというのが生涯学習ではないかと思う。勉強、学習、学び、履修、就学とか国語的に言うと、学びに対する言葉はたくさんある。しかし、本来、遊びだって学びの一つでもあると思う。私も若気の至りで飲み過ぎて二日酔いになると先輩方からお前ちょっとは学習せよとよく言われた。そのようなことでも学びであり、一つ一つが学びということをいま一度、本当に考える必要があると思った。この審議会に生涯学習という名前を付けた以上は、資格を取るとかそういったことではなくて、もっと砕けた趣味の世界や遊びの世界も含むと、周りがそういう雰囲気醸し出していかないといけないと思う。

私はいまスマホを持っているが、LINE で区長業務の連絡調整をするためにやむを得ずガラケーから変えた。パソコンもほとんど使えなかったが、自治区便りや回覧文書を作ったりするため少し覚えたことを考えると私も生涯学習をやっているのではないかと感じた。身近にあるこうしたことが、生涯学習の一環とい

う捉え方をしていけばいいのかなと思っている。

L 委員

最近、製造業の 50 代社員を対象とした、キャリアデザイン研修の講師をすることが多い。キャリアデザイン研修は、定年後のキャリアを考えるための研修であるが、「生きがい難民」という言葉を紹介しており、趣味や遊び続けることに飽きて、その後やることがなくなって図書館で過ごすみたいなこと。そうならないためには、誰かと一緒にやる、誰かに喜んでもらう、目標や目的があることが大事だと伝えている。日本かつ愛知県の特徴かもしれないが、50 代以上のサラリーマンの方は転職経験が少なく、自分のことを見直す機会が全くないまま 30 年ぐらい企業戦士として勤めた人が多い。その中でも自己理解を進めていくと、小さい頃夢中だったこと、最近面白いと感じることなどに気がついて、学ぶ意欲行動のきっかけにつながると実感している。そのため、学ぶことと自分を理解することをセットにした施策が良いと思う。

また、事業活動を通して感じることは、教えたがる人がたくさんいるということ。インプットが多ければ多いほど学んだ後に教えたがり、話が長く押し付ける傾向にある。聞く側の子どもたちや支援を受ける側はとても苦しい。その意味では、学び合いという言葉がとても良いと思う。研修の中でも好きなことや得意なことを 10 個以上上げてもらう中で、例えば、釣りが得意な人と料理が得意な人が学び合う、教え合うといった関係性はすごく重要だなと思っていた。そのため、学ぶという一方的なインプットだけではなく、学んだあとの出し先を施策の中に入れていただけるといいなと思った。

それと、聞いてくれる人の存在が自己理解にもつながるので、交流館、学校、地域にそのような場やコーディネーターがいるとよい。

今後、AI の発達に伴い、今年中か来年になると、SNS で一人が 1 日で 10 投稿できる時代になると言われている。ものすごい情報量を投稿できるとなったときに、受け取り手がとてもじゃないけど受け取り切れない時代がくる。そうになるとデジタルデバインド解消と言っていられなくなるかもしれない。やはり、信頼ある人と誘い合う関係が作られることがすごく重要で、そのためにも関係性作りを力を入れた方が実はとてもいいのではないかなと思う。

A 委員

結論はなかなか出ないと思うが、これから 100 年生きられる社会になった中で、学びや学習を基本にどう生きていくかといった議論だったと思う。日本では、レジャーは暇つぶしとか気晴らしみたいな議論になるが、海外では、レジャー学という形で、教育学の中に入っていたりする。私たちがよく使うレジャーは、カ

ジュアルなレジャーで、飲み会、カラオケ、旅行に行って気晴らしすること。最近、シリアスレジャーという言葉があり、真面目なレジャーと訳し、自己研鑽、ボランティア活動、忍耐を必要とするような活動のことをいう。この話をうちの学生たちにしたところ、「その概念はもう遅れています」と言われた。今の学生は、学び、仕事、レジャーのような遊びが一体化していないと働きたくない感覚を持っている。その意味では、学校は学習・教育の場所、労働の場所、余暇時間と分けてきた生活のあり方は過去の工業社会の合理的な生活の仕方だったはず。今そうではなくなっている。そうなってくると若い人たちを中心にこれから100年生きる社会における学びっていったいどんなことなのかと問われると思った。

また、彼らはSNSを信用してないことがわかってきた。だいたいSNSで情報をとっているが、遊ぶためにとっているだけで信用していないらしい。何を一番信用するかというと口コミだと言っていた。私の知り合いの中でつきあいがある小学生たちにどんな情報で行くのかと聞いたら、先生や大人の目がきちんと入っている学校から配布されるチラシだと言っていた。その意味では、今の子どもたちは、デジタルリテラシーがある世代である。そういうことも含めて今後情報の出し方ということも検討しなければいけないと思った。